

西照寺々報 “さいしょう”

第5号

1987年3月18日

発行 浄土真宗本願寺派・西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

西照

雑感

橋本芳雄

前回発刊の西照寺報に私の尊敬する米沢さんの「もったいない」と「無駄」に就て御意見を拝読し、私も自分の生活の実体を反省し本当のものはなんだろうと迷っていました。十二月三十日北日本新聞（天人）の欄に次の様な事がでていました。お読みになった方は御存知でしょうが、若し御参考になればと思ひ私見も入れて例記しました。

戦死した夫との思ひ出深い火鉢を、息子の嫁が粗大ゴミに出しているのを見つける。息子夫婦をなじると「傷だらけで炭もない時代には不要」と相手にされないと「傷だらけの時、長く迷ってついに老人ホーム入りを決意する。そんな小説があった。年末の大掃除になるとどっと廃品やゴミが出てくる。もう使えぬと思っても捨て切れないのが昔人間だ。もったいないだけではない。そこに消えぬ思ひ出がしみついていられることもあるだろう。モノにも人の心が通い合うことを現代は忘れかけている。ゴミをみるといふんなことを考えさせられると云うのは、氷見市の燃えないゴミ収集をするIさん。父母が大切にしていたであろう座ぶとん付きの「えびす」の置物が捨てられていたことある。ある時は針金で縛った猫の死体を見つけ、ゴミとして捨てた人の心が悲しくなったという。と思えば、袋にマジックで「ご苦労さま気をつけて下さい」と書いてあるのを見て、胸の奥がじーんとした時もあった。「あなたの心はどんな形のゴミになって出ていますか」と。結ばれたこの

話は「ゴミに学ぶ人間学」と題してKNBパーソナリティ吉友嘉久子さんが紹介したものだ。

「飽食飽和」の現代社会、世代間の価値感の違い、それが本物なのか新興宗教はどこも満員、いかにナヤミ事が多いかを物語っている証書である。

幸い私達二八会々員は、お互いに手を合せ感謝し「日々之好日」、昨日があるから今日でなく、明日があるから今日がある。過る一日を感謝し、希望をもってあしたを迎えたいと念じながら生活をさせていただいています。

また皆さんの御意見を賜りますれば幸甚に存じます。

合掌
(西照寺 二八会々長)

親鸞聖人御誕生八百年
立教開宗七百五拾年
庫裡改築落慶
門信徒物故者追悼

慶讃法要勤修

五月十六日速夜（午後二時）

十七日日中（午前十時半）

速夜（午後一時半）

お誘い合わせの上、ご参詣下さいませ。

ひかり来たりにて — 仏陀の出現 —

(5) 苦の事実と縁起の法

岡 西 法 英

釈尊の教え、すなわち仏法といえは、修行して覺りを開くことという実践的な面がまず頭に浮かびますが、それは、釈尊が覺りを開かれて後に他の人々に説かれた教説を中心にした見方ということになります。

実はその前に、苦の事実に対する直視と、縁起えんぎの法の発見ということが、仏法の出発点と根本原理としてあるわけです。そして、このこそが仏教という宗教の根本的特徴なのです。

はじめに神がいて、そこから話しが始まるという多くの他の宗教とは違い、現に今の此の自己自身の苦なる事実から出発するのです。

「自分以外のもの」(神や祖先)から出発するのではなく、「自分自身の」、觀念からではなく身の事実から出発されたのが釈尊でありました。

そして苦の解決は、法に目覚めること、過去・現在・未来を貫いて、あらゆる世界に於いて妥当する、誰にとっても自己の真相である縁起の法をさることから開かれると教えられました。つまりは、法ほということが仏教の中核です。神でもなければ運命でもなく、善悪でもなければ吉凶禍福でもありません。觀念を離れ評価を離れて、自己自身の事実を直視した中から見い出された法ほの上にた

つ宗教が仏教なのです。

この事は「苦」、「縁起」という教えによくあらわれています。

「生まれることも老いることも、病むことも死することも苦である。憎しみあう人と会うのも苦、愛しあう人と別れるも苦、欲しいものが得られないことも苦である。総じていうと、この人生のあり方すべてが苦である」という言葉をよく味わってみたいものです。この中で特に注目すべきは「生まれることは苦である」という最初の言葉です。

これは、「生まれる時に苦しかった」という意味ではありません。私自身が望まず、願わず意図しないのに生まれてきた。気が付いた時には既に生まれていたという事実。人は自らの生まれを選ぶことはできないという事実そのものをあらわしています。まさしく人生はその最初から意のままならぬものであるという冷徹な事実を直視した言葉です。

生まれようという意志の力で生まれてきた身ではないからこそ、願わないのに老いてゆくのです。望まないのに病むのです。誰もがそれを嫌うのに死んでゆくのです。

生まれ、老い、病み、死ぬという誰もが避けえぬ人生の事実こそ、我が身と思い、我が命と思っているものが、我が思うままにならぬもの、我がものとはいえないものであることの証拠です。

あてにしたいともあてにならないのが無常の此の身であり、ままにしたいともままならぬものが此の身であり、何一つ我がものといえるものがない空しさを免れないのが此の身であるということに、苦しみ悩まないでいられないのが私という人間であるという事実が、仏法の出発点でした。

そしてその事実の奥に、あてにならぬものをあてにしたがる執らわれと愚かさ、ままならぬものをままになるように思う執らわれと愚かさ、我こそ、我が物と執らわれる愚かさ、自分は誤っていない自分に

問題はないという思いあがりがかくれていることに気付かれたのが釈尊でした。自らの執われと愚かさに目覚めて、これを克服する智慧を得れば苦悩を滅することができると。万人の苦悩の解決への道、苦悩する人間の歩むべき道を見いだされたのです。

この事を教えられたのが「縁起の法」というものです。「縁起」はまた「因縁」とも言い、同じインドの原語から出ており翻訳語としての違いがあるだけで意味は同じです。

「仏教は縁起の法が根本」といわれる時、何を言おうとしているのかを考えてみますといくつかの要点があります。

一つには、現われた結果よりも、それが生じてくるための原因や条件をこそ問題にしなければならぬということです。この場合は、果に対して因を重んずるので、「因果の道理」とも言い、縁起(因縁)Ⅱ因果という形で言葉が使われます。結果ばかりを並べ立て、「ああだった、こうだった、こんな目に遇った」と自分の方に原因があることを忘れた言いぐさを「愚痴」(因果の道理にくらいこと)と称するのはこの意味かと思われます。

二つには、「これが原因」という形で、一つの原因というものがあるのでなく、さまざまな因子がからんで結果があらわれるということとです。「縁起」(もろもろの縁によって起っている状態)という言葉はこのことをよく表しています。「神のおぼしめしだ」「運命だ」「あいつのせいだ」「病気さえなければ」「これが悪い」と一つのもので取り上げて、それを原因と考え、たいていは自分を問題にしないで何かを悪者にしたで、それさえなくせば問題が解消するように思いがちなのが我々ですが、そんなことでは問題解決にならないことを意味しています。

三つには、もろもろの縁といっても、その中には、主要なものとする随的なもの、必然的なものと遇然的なもの、近いものと遠いものがある

り、特に内的なものと、外的なものとがあるのであって、内的なもの程、必然性をもった主要なる縁(すなわち因)であるということとです。「内因・外縁」というような使いわけがされるのはこの場合で、「因縁」という言葉はこのことをよくあらわしています。迷いと苦悩の原因は無明(無智)であるといわれるのはこのような意味に於いてです。このようにみえますと、「縁起の法」は仏教の基本的特徴のすべてを生む根源であると同時に、釈尊の歩まれた求道の過程をよく反映していることがわかります。

世俗的安逸の中にあつて、誰も免れぬ人生苦に目覚め、神を祭ること、運命を占うことを放棄すると同時に遇然論を否定された釈尊、心を静める禪定や欲望を抑圧する苦行によつても抜き難い苦悩の解決は自己自身の内実を問うところから見出されたのでした。

縁起の法は決して科学理論や理屈ではありませんし、所謂客観的事実でもありません。苦悩する人間が自らの苦悩に向い合った時、事実としてうなづかれる、あくまで自己自身の内面的事実であると言わなければなりません。その点では「一切皆苦」ということも同じです。

「生かされている」「お陰様」という言葉で表現される仏法は、釈尊のお言葉の上では、一切皆苦(何一つ我が意志の力にあらず、思うままならず)、あるいは、縁起(もろもろの縁あればこそ)ということで示されていたのだと知ることができます。と同時に、「生かされている」「お陰様」は、一時的なかりそめの安逸を意味するものでなければ、必ずしも幸せと喜ぶことでもなく、万人が生きてある実相そのものであり、そのことを知らされた人間であること々そのことの深いおどろきとよろこび、謝念を表わすものであったことがわかります。どのような苦難の中にあつても目減りのしないしあわせこそ「生かされている」「お陰様」という事実であつたのです。(つづく)

(高岡市内島 教願寺副住職)

